

平吉どんの眼

◎疑う。何が本当で……編

常識の壁をぶち破りたい。

嘘が充満している。この壁をぶち破り少しでも『本当』に近づいて自分の人生を活かして満喫したい。あなたは「あまくい美しい言葉の嘘の眼に見えぬ抑圧に本音を語れずにしてのではありませんか?リスクを喋らない甘い建前論の美しい言葉の羅列から出来上がった常識の嘘の無言の圧力で、本音を語ることを恐れてはいませんか?父が言った。「正義を口にするものは信用するな!立場、立場で正義はいくつもある」と。これを解決するにはⒶとⒷがある。Ⓐはこんないい事がある。しかし、こんなリスクを伴う。ⒷにはⒶにはないこんないい事がある。しかし、こんなリスクが隠れている。しかし、自分達で選んで前に進まねばならない。あなたはどうらのリスクを受け入れる事が出来るか。あなたが決めなければならない。リスクを語らず、正しさだけを語る嘘をバランスのとれた正義だと思わされてはならないのです。

美声を作らず地声の方言で語り始めなければ常識の壁は破れない。

いつの頃からだろう?「いじめは教師、学校の責任だ。」と言われ始めたのは?親の責任はどこに行つた?その親はあなたであり、この私だ。

知らぬ間に出来上がつてしまつた常識の壁は厚い。

昭和37年、出張先で、ひどい腹痛に襲われた私の父は帰宅後、こう話した。「てんぷうとすいかを食べた。喰い合はせでやられた。」その頃は置き薬屋がくれた喰い合わせの表がどこの家にもあり、部屋の片隅に貼つてある。というのが常識だった。

今、そんな事を信じている人はまずいないだろう。

30数年前、医事評論家の石垣純一氏が卵の及ぼすコレステロールについて、「何個食べても大丈夫」と発言して、大学教授の医学者から総攻撃を受けていた。

今では完全無欠に近い食品と絶賛されている。

子供の頃「夏にはアイスキャンディー屋のしようやんという、棟方志功ぱりの厚いレンズの眼鏡をかけたおじさんが自転車の荷台に水色の木箱をのせて、幟(のぼり)をたなびかせて一日一度やって来ていた。店(地元の食料品店)に行つても売つていないのだから仕方がない。

いつもの時刻に鳴る手振りの鐘の音が聞こえるのを遠くから待つていた。あれから5、8年が通り過ぎた。

今では、スーパーや道路の両脇に立ち並ぶコンビニで子供から大人、老人まで、24時間いつでも手に入りその甘さと冷たさをガリツと味わう事が出来るようになつた。私の子供達は今や何の疑いもなく、それは常識になつてゐる。アイスキャンディの時代を経験した私達だからこそこんな事を思う。

あの頃、思つていた幸せが、今ここにある。

しかし、私達だからこそ「これは本当の幸せか?」という疑問符をつける事が出来る。「こんな食生活でいいのか、

平吉どんの眼

「食育とは何だ！」健康的な生活の基本は食生活に尽きる。何でも何時でも手に入る中で、食は食欲だけに任せた食生活を続けていいのか？それは今流行りでいうところの「自己責任か！」それが自由か？専門家は本気で広めて伝えているか？学校教育で必ず学んでおかなければならぬ事がここにある！

目先の食欲と目先のメタボだけの処理に私達は翻弄されとはいひないか？日本食は本当にヘルシーか？肉食は生活習慣病の元凶か？ベジタリアンこそ理想の食生活か？そこに巨大な常識の嘘がはびこってはいないか？金の絡みで作り上げられた天狗の蓑を被り見えない体にしながら堂々と高笑いしながら闊歩してはいないか？

「平吉どん、そこまで言つたか！」「時は流れている！」と誰かが言つている。大粒の汗を流して来た父達の時代の労働者は工夫に努力を重ねて、新しい器械を開発して、今では手塚治虫氏が描いてみせたロボットの時代に突入している。今では快適な環境の中で汚れる事、汗をかくことさえ経験せずに暮らしていける。そして、私達の孫達は、それを常識とさえ思わない意識下の中に埋もれさせた世界で生きてゆくだろう。そして、それは父達が望んだ夢の物語であつたのだろう。

しかし、「それは本当か？」と少なからず汗をかき、荒い息を吐きながらリヤカーの後ろを押して来た私達だからこそ、これを疑える。「汗を流さない生活こそ夢の生活か？それは生き物の本当の生き方か？」私の短かい歴史の中の変革期は1964年（昭和39年）前東京オリンピックの年だ。そこから私達の生活は目まぐるしく変わり、方言も知らぬ間に消えてしまつていった。

私達の常識は意識する事なく広がり、流れ、過去を振り返るという動作も「何？それ！」の時代になつた今、ある常識の中にあらゆるもののが飲み込まれていつたという思いが、ふと頭をよぎる。

「本当のものは何だ？」「本当に大事にしなければならないものがあるはずだ！？それは何だ!?」

いつの頃からだろう？
家の玄関先の掃除を毎日しなくなつたのは、母は「掃き掃除は隣家にかかるまで掃きなさい。」と言つていた。

道路は役所・行政がきれいに掃除し管理するのが当たり前！そして、「私達はその為に高い税金を払つてているのだ。」との一言を声高に言い始めたのは？権利の大安売りの時代で、これもまた常識となつたのです。

「何しとる！鎌でケガでもしたら大損じやろうが、役所にゆうて刈つてもうええんじやが！」……そしていつか里山里道は草だらけになつてしまつた。これが民主主義か？自由、平等、資本主義の常識か？

私は昔見た、おばあさんが八幡山のすそ野の道を奉仕の心で、今でいうボランティアで草を刈る姿を思い出す。草刈り機のない時代に汗をかいていたその姿を思い出す。今では草刈り機でアッという間にすんてしまつ仕事を日の沈むまでして、その姿を思い出す。しかし今では奉仕の心も草刈り機も顔を見せない。自分達の村は皆それぞれ自分達できれいにして守つていくといつ心掛けは消え失せてしまつたのか？せめても…と挨拶をし合つていれば「ミユニケーション

ンはとれているという望みを含んだ常識も、笑いながらする共同作業はそれを吹っ飛ばし、喜びを心の中に湧きおこさせてくれる。行政の責任という常識が人を思いやる心、優しさを草でおおつてしまつた。国にクレームをつけるのも当然アリだろう。県しかり、市しかり、組織が大きくなればなる程、一市民の声は「前例がないとの一言」で遠ざかる。

これが、町、村となればどうだろう。

役場で「課長、あそこが崩れそうじゃ！」

「よつしゃトモくん、すぐ見に行こう！」こんな場面が目に浮かぶ。予算がない。しかし、臨機応変。どうにかしよう。それが人の心に火をつける。皆の団結を産む。助け合うといつゝ心が育つ。

災害にあつた被災地で大切なことは何だろう？

皆んなの暗く落ち込んだ心を奮い立たせる事。明日への光こそ、困難に立ち向かわせる生きる力をよびおこすことを東北の根浜の人達の交流で学んだ。そして、笑いが大いに役立つという事も教えられた。

デフレといわれたこの20年間、玉島はまるで被災地のように見えた。どんよりとした曇りの日が続いているようだつた。

今、皆んなの心の奥底に何とかしたい。何とかしよう。という熱い思いが湧いているように思える。真綿火が、火は消えたかと思いきや、かすかな風をうけて、燃え始めているのを感じる。

私達に出来る事はないのか、遅いぞといわれながらも、私達は仲間と共に町内の里山の草を刈る事から始めた。流す汗は快かつた。

私に出来る事はないのか？私を最大限に生かしながら出来る事はないのか？

それは、私の得意とする事で始めるしかないと気がついた。

私は十代からどうにか生き残らえてきた。

両親の温情から美術（彫刻）を志す事を許された。その唯一得意とする美術で笑いを含んだ企画を考えた。（玉島発信おもしろがり企画、第一弾は2015年4月城岡辻町内作家展）今回第2弾（新・玉島の玉コソテスト）を仲間の無条件のサポートと姉、家族のおかげで開催の運びとなつた。私は人に恵まれてゐるといつづく思う。ありがたい。

又、今回は玉島の商店の皆さん私が私の図々しいお願いを快く受けて下さり、数多くの賞品の提供をして頂きました。誠に頭の下がる思いでいっぱいです。ありがとうございました。玉島のより多くの人達の明るい笑いが生み出され会場に響き渡る事を願つて止みません。

私も常識の壁を破る一穴掘りの蟻になりたい。

感謝……柚木平吉